

◆開催日時 平成31年3月19日（火）午後7：00～午後9：00

◆開催場所 東近江市市役所新館 311会議室

◆出席者

市民協働推進委員 深尾昌峰、小森秀樹、塚本喜久藏、大橋正徳、森下瑠美、藤澤彰祐、  
小嶋一浩、金子泉美、辻薫、園田由未子、小島なぎさ、山本十三、  
奥田新悟、井上文子（欠席：大林恵子）

事務局 まちづくり協働課 曾羽、久保、込山

（傍聴者：0人）

◆議事

- 1 『共に考え、共に創る わがまち協働大賞』の振り返り
- 2 協働のまちづくりを進めるための取組について

◆会議録

開会

#### 【事務局より開会のあいさつ】

皆さん、こんばんは。ただ今から平成30年度第4回目の市民協働推進委員会を開催します。本日もよろしくお願いいたします。

#### 【委員長あいさつ】

皆さん、こんばんは。今日は協働大賞の振り返りと、来年度に向けて、これまで継続して議論をしてきた地域コミュニティの存続、特に自治会活動について進めていきたいと思えます。

まず、わがまち協働大賞の振り返りを事務局から説明いただき、皆さんから感想や来年度に向けての改善点やよかった点などを出していただきたいと思えます。

#### 【協働大賞の振り返り】

\*わがまち協働大賞（資料1）をもとに説明

（委員長）

説明にもあったように、市民協働推進計画に位置づけて、みんなで褒め合おう、頑張っている人を励まそうということで始まり、副賞の協賛は市内の事業所を中心に、受賞団体の方がクーポン等を利用することで、会話が弾んだりつながりができてくるというような協賛のあり方をめざしてやってきました。事務局の行政やまちづくりネットの協力を得ながら、協賛事業所も安定的に広がってきています。

中学校の審査も若い世代に興味を持ってもらおうと昨年度から実施し、また、皆さんには第1次選考を通過した事例に対して、申請書だけでは分からないことを、ヒアリングに行っただけで実際に生の声を聞くことで、委員と団体がつながるきっかけや、きちんと応援できる審査をしたいということで実施しました。

1年の流れを振り返っていただきながら、今後のあり方や改善した方が良い点などを挙げていただければと思います。今日出た意見は、来年度、協働大賞の議論をする際にフィードバックをしてつなげていければと思います。どの角度からで結構ですのでいかがでしょうか。

(委員)

市民意識調査の中で一定の成果が出たという結果ですが、協働が分からないという意見が多いですね。私も委員をしていますが、正直なところ何が協働なのかが分かりません。今年大賞を取られた事例は、協働が何か分からなくてもすごいことをされているというのは分かるのですが、協働のこんな事例を表彰したい、盛り上げていきたいという本来的な部分が一般の人には分かりにくい。そういったこともあり、応募件数が決まってきたのではないかと思います。1年目は非常に多かったのですが、2年目以降は似た数字になっていて、お付き合いでもらっている事例もあるのではないのでしょうか。その辺りを、どのように周知して応募件数を増やしたり、協働ということを分かって応募してもらうにはどうすれば良いのか、良い案は浮かびませんが、そう思いました。

(委員長)

協働ということ自体をどう伝えていくか、わがまち協働大賞という名前ですが、分かりやすく伝えていく努力が必要だということですね。

(委員)

今年初めて関わった感想としては、審査の労力は大変だったと思いますが、あれだけしないと決められなかった、これ以上、手の抜き方はないのかなと思いました。特に、点数だけで決めたのであれば私自身不満があったかと思うのですが、最後は話合いで決めようというのが良かったです。

一番の問題は周知、どれだけの人が知っているのかということだと思います。ケーブルテレビで周知しているとのことでしたが、割と見ている方ですが見逃していました。ユーチューブでも流すなどしてもらっていますが、もっと見せる工夫が必要なのではないのでしょうか。

また、協賛事業者一覧表を見ると、関わっている人数が少ないような気がします。例えば京セラや凸版印刷といった地域の大きな企業に関わってもらえれば、勤めている人みんなに関わってもらえるということもありますし、逆に、趣旨に賛同してもらっている人だけに協賛してもらっているという高い理想であれば、大きい企業にはそこまで伝わりきらないということと、ローカルな作用がわかり合えるのは難しいのかなとも思いながら、どちらが良いとも言い切れないところですが、アイディアの1つとしてあげさせていただきます。

(委員長)

どちらも大事なのでしょう。分かっている人を増やしていくということと、あまり興味がない人が知るきっかけとして、大きな入口を作ってさりげなく知ってもらうことから入ってもらうことも必要ですね。来年度は5回目なので、今のアイディアも含めながら早めから動き出せればと思います。

(委員)

来年度で5回目ということですが、名前が堅苦しいので、すぐ分かるような愛称がほしいです。

(委員長)

愛称がまちで流通してくれば本物ですね。そういうものを意識的に使うということはあっ

てもいいかもしれません。先ほどの話同様、どう浸透させていくかということに工夫が必要ですね。

(委員)

エントリーを呼びかける際に、一步踏み出すにはエントリーシートが難しいです。活動している方に広くエントリーしてもらおうと思うと、ヒアリングで聞けることもありますし、項目の言葉を換えるだけでも変わるのではと思います。私も書くのに悩んだところがあるので、市民の方でももっと簡単に書けると良いですね。

また、参加したからこそ、協働されている団体をたくさん知ることができたので、こらぼ村などに参加すればつながるきっかけになるということを知ってもらえれば良いのになと思います。こらぼ村は参加団体が毎年増えているので、一般の方も気軽に入ってこられるようなものになれば、初めてこらぼ村に参加した知り合いにも良いきっかけになったと言ってもらえましたし、伝えるのはなかなか難しいですが、協働のおもしろさを伝えられると興味を持ってもらえるのではと思います。

(委員長)

項目は来年度改善しましょう。簡素化したつもりですが、初めて書く人にとっては言葉が難しすぎる部分があるかもしれません。ヒアリングで補足できる部分もあるので、1次審査を通過してから書いてもらうシートなど、エントリーの時点ではもう少し気軽にして2段階にするという方法もあります。

(委員)

ヒアリングに行く側と受ける側のどちらも経験して、褒め合うということがキーワードだと思いました。ヒアリングに来ていただいた時に褒めてもらえて、自分たちの取組に対して自信を持てました。まちづくり協議会の広報誌を見ると、五個荘地区と能登川地区で受賞しましたという記事が載っていて、そういったことから広がりが出るのかなと思いました。

また、単純な感想ですが、入賞したところは華やかな活動が大賞を取るという感覚があり、エピソード賞もありましたが、地道な活動をしているところに光を当てた賞があると良いなと思います。

(委員長)

地味だけど住民のみなさんが力を合わせてコツコツ頑張っているというような事例に対して光を当てるとするのは重要だと思います。私たちが審査する時に、そういった視点を持つておくことが重要ですね。

(委員)

エントリーシートを書く側としては、書き出すと自分の中でも振り返りができたり、いろんな人にお世話になっているのだなと気づくことができるのですが、書く決めてまでにハードルがあるように思います。自分がやっている活動を多くの人に周知したいという人にとってはメリットがありますが、例えば、派手ではないけれど地道な活動や、褒められたいとか周知したいと思っていないような活動であれば、エントリーするまでのハードルが高い気がします。大賞という性格上、このようなやり方でないと出てこないものなので、まったく別のやり方で、表彰ではなくて応募されたものを張り出したり配るだけといった形であれば、ハードルも低くなるのかなと思いました。

(委員長)

言い換えると当たり前のもの、その地域ややっている人にとって当たり前すぎる特別じゃないものというのは出てこないですよ。自然とやっていること、でも外から見るとすごいと思うものは当然ありますし、他の地域ではできなくなっているようなことなどは、やっている側からは出せないのかもしれませんが。

やってもらっている側からの他薦のあり方、こんなことで助かった、こういった取組が素敵だと思うといったエントリーの仕方もあっていいかもしれません。褒められるためにやっているわけではないとか、昔からやっていることはあえて出さないですよ。

(委員)

エントリー数について、もっと方法はないかと考えていたのですが、1次選考後にヒアリングに行っていますが、発掘のためのヒアリングというのも面白いのではないのでしょうか。地域のキーパーソンに、身近で頑張っている団体やきらりと光る取組を聞くと出てきそうだと思います。

協働というと行政と協働しているところは比較的に出てきやすいのですが、市民同士はなかなか拾いにくいものです。今年、事務局から声をかけて出してもらったものと、純粹に応募されたものの比率はどれくらいでしょうか。

(事務局)

無理に出してもらったものはありません。協働大賞を知らない方が多いので、「協働大賞というものがありますが、どうでしょうか」という声はたくさんかけました。

(委員)

行政が把握している活動に偏ってしまうのではないかと考えたので伺いました。

また、審査の中で、成熟度合いは団体によって違うので審査しにくいと感じました。何年も活動を積み重ねられた団体と、アクションを起こすこと自体に意味があって実績はまだないという団体では、その差をどう捉えて点をつければ良いか、それぞれの段階で素晴らしいと思うのですが比較をするのは難しいです。ひよこ賞、鳥賞など、段階によって賞を分けた法がやりやすいなと思います。

(委員長)

今いただいた意見を踏まえて、来年度また議論をしたいと思います。また、常に情報収集をしていただければ嬉しいです。毎年これくらいの数の応募があること自体は、非常に素晴らしいと思います。ただ、皆さんの実感ではまだあるという感じですので、まちの宝物を発掘するという感じで、お願いしたいです。

それでは、次に協働のまちづくりを考える、特に地域コミュニティの存続について、1年間議論してきました。前回までの振り返りと、具体的な自治会の困りごとについて報告してもらいます。

### 【協働のまちづくりを進めるための取組】

\* 前回までの振り返り（資料2）、自治会の困りごと（資料3）

(委員長)

前回までの議論と、具体的な自治会の困りごとを提起していただきました。

進め方ですが、今年度は今回で終わりですが、来年度も引き続きこの議論をしていきます。

ここで一般的なことを話していても変わらないので、できれば、一緒に考えてほしい、一緒にやってほしいという自治会とこの委員会で、現場で一緒に考えたり具体的に実践したいなと思っています。一緒に汗をかいて、その中で出てきた知見を一般化することができればと思っています。

そういうことを前提に、何をしていけば良いかといったアイデアや、自分の住んでいる地域の状況、今の6つの項目以外を足していただいても構いません。今出ている問題について、自治会とどのようなパートナーが協働すれば解決できるかなど、どの角度からでも良いので、皆さんからの直感的なアイデアや疑問や提案をざっくばらんに出していただければと思います。次回整理したものを議論しながら、具体的にこの部分をチャレンジしてみようとか、現場の自治会で頑張っている人達と一緒に話し合ったり、実際に実験してみるといった積み上げができれば良いと思っています。どんな観点からでも良いので、自由に話していただければと思います。

(委員)

自治会よりも規模が大きくなりますが、うちのまちづくり協議会で去年“法人税での実費弁償方式”を外しました。実費弁償方式は、もらった委託料を全て使い切ることで法人税がかからない特例ですが、収益になることはしてはいけなくなっています。もっと地域の人と関わり合って、今まで通りではなくいろんな事業をしていくには収益事業も必要だということで、税金の申告は必要ですが、そうしました。まだこれからどうなるか分かりませんが、そんなこともしています。

(委員長)

“稼ぐ”ということですね。収益をあげて、財源を作って、必要なことに取り組む。収益を上げてこんなことをやらないといけないといった議論があったのでしょうか。地域で場をつくるとか、高齢者の見守りといった文脈ですね。

今まで自治会やまちづくり協議会には、稼ぐというフェーズがあまりなかったのですが、チャレンジして、地域でお金をつくって事業をするということに向き合っているというお話でした。

(委員)

私が住んでいるところでは、地域で大切にしたいものを1つ決めて、それに向かって活動をしています。そのビジョンに向かって基本計画を作成して、私たちも資料と同じような課題を抱えているので、それぞれの課題に対してどこが担当するか（高齢者の増加については福祉委員会、空家の問題であればまちづくり委員会、農地であれば営農組織など）を決めて進めています。自治会だけでいろんな課題を解決するというのは難しいので、専門委員会制にして担当を決めてやっている形です。役が増えるのでどうするかという部分もありますが、今後の集落で必ず守っていきたいことを決めてから、取捨選択して、専門性を持たせて取り組んでいます。

(委員長)

全部を守れない状況だと、優先順位を住民主体で決めて取り組んでいるという話です。逆に言えば、ビジョンをどう共有するのか、東近江市の場合であれば、まちづくり協議会の単位か自治会の単位か、地域によって違うかもしれませんが、何を大事にするのかというプライオリティを考えると議論は必要ですね。放っておくと仕事は増えてしまうものなので、

止められることは何なのかという引き算の議論です。日本人はそういった議論が苦手なので、なし崩しになくなっていくよりは、ちゃんと守りたいものを優先順位をつけようということです。シビアな部分もありますが、そういった議論の中でビジョンが形成されるというコトですね。それをどう東近江市に落とし込んでいくかですね。

(委員)

社協の仕事で各地区に入って自治会の話などを聞くのですが、どこの地区でも同じような悩みを持っておられると感じています。

祭りに関していうと、中学生も実は継承していきたいという気持ちを持っているが、親世代が面倒で煩わしいと思って簡略化されているので、しっかり伝えてもらえないと感じている子どもたちもいます。大人と子どもを上手くつなげられると良いのにと思いながら、実際にはどう切り込めば良いか難しいところです。子ども達に地域愛があると地域に関わってくれる土壌ができると思うので、それを大人がどう盛り上げていけるか、大人も楽しんでいかないといけないのかなと思います。

また、自治会の役が多いとか、同じようなことをしているのであれば一緒にすれば良いのという話をよく聞くので、その整理を一緒にできれば。各種団体など、しんどさをシェアできると良いのかなと思います。

(委員長)

大学生と一緒にいると、昔の学生に比べて社会への関心や興味は非常に高いです。でも、どうすればいいか分からない、足場がない。関心がない親世代だと子どもの頃にまちと関わってなくて悩んでいたりと、引け目に感じている学生が多いというのが事実です。中学生世代でもまちに関わりたいと思っているのではないかということは、いろんなところで耳にするので、どうやったら巻き込んでいけるかということは、議論の余地があります。

また、重要なキーワードだと思ったのは、一緒にできること、地域内の協働、地域外のいろんな力を地域に持つてくることで一緒に取り組むということです。しんどさの共有ということは、成果や楽しさのシェアでもあるので、足りないものは外から借りてくるという発想や、地域の中で同じようなものを統合するという発想ができるのではないかという話でした。まだぼんやりとしてますが、可能性はある話だと思います。

今の中学生を見ていると、まちに対する眼差しが非常にあると思います。余談ですが、先日学生から、「消防団はどうやって入るのですか」という相談を受けました。やりたいとか、うらやましいと思っている若者はいるのに、余計なことはするななどという親世代がいます。そのギャップをブリッジしていけるといろんな人達に関われるのかもしれないですね。

(委員)

正直な印象として、大事なものを残すということは妥協するものを選ぶこと、これだけ人口が減っているのが今まで通りではできないので、その中で大事なものを残すためにこれは諦めようと決めることは大事だと思うのですが、怖いと感じていることが2つあります。

地域の行事や宗教行事をするときに、案外、副産物の方が大事ではないかと思うことがあります。子ども会の行事であれば、行事をすることで子ども達が集まったり、親が集まってつながりができるとか、煩わしさこそ大事だったりする中で、地域の人が気づいていないレベルで重要なものがあると感じています。

委員会が入って妥協をするものを選んでいくときに、どこまでみて選べるのだろうか。選

んでいかないと地域はもたないと思う一方で、いざ止めるとなったときに、地域外の人や声の大きい人の意見を聞いてしまって、そこまでの責任は取れないという怖さと心配があります。

(委員長)

私たち委員会として一緒に悩むということではできると思いますが、最終的な意思決定は地域の人がやらなければいけないことですので、私たちが全て決めるのではなく、寄り添い方や悩み方を考えたいと思います。今のような懸念や心配は大事だと思います。主体は住んでいる人達なのですが、こういった議論をする中で、気付けることや、プロセスの重要性に気付くということが大事なのかもしれません。

(委員)

祭りが好きで、農村神楽や古い祭りなどを見に行ったりするので、そういったものが消えてほしくないし、集落の人達の維持で成り立っているということを感じるのですが、今までの歴史の中で、人が集まっているところに祭りができてきたと思うので、逆に、人が減ったところでは維持できなくなるということは、自然な流れでもあると思います。

ひとまず、自治は人がいないと自治でない、人がいるからこそで、その人をどうやって確保するかということが集落の維持に関わってくるのだと思います。自治会によって今後どうしたいか。人口減少は確実で、集落ごとに人口減少予測は数字で出るので、何年後にはこれだけの世帯や人数になって、これが維持できるのかということと、きちんと自治会のみんなと向き合って、今どうしたいか、集落をどうしていきたいかという話合いの結果、人を増やして維持させたいとなれば、自治会が収益活動ができるような組織化をして、営業的に人を探しに行くような話が出せるのかな、と思いました。

また、自治会の形として、地球ハートビレッジさんのような形も新しいし面白い、先ほど“楽しい”というキーワードがありましたが、こういった形が自治会の代わりを担うというのも別の視点で面白いなと思いました。

(委員長)

人口減少が進むというのは社会全体として確実で、私たちが今まで経験したことがない状況です。そういう意味では、予測は非常に大事で、将来こうなると分かっていることをどのように可視化させるか、健全な危機感を共有するか、どうデータを共有するかということは避けて通れないでしょう。そこを出発点にすることは大事ですし、それを踏まえた上で足元の暮らしをどうつくっていくか。これまでどおりにしていてもダメだということは、みんななんとなく分かっているのですが、現実的に起こるのか、なんとかなるのではないかという気持ちがあるならば、ちゃんとしたデータを分かりやすく可視化させることが必要です。

空家の問題であれば、持ち主に帰ってくるのかどうかを聞いて回れば、10年後の空家率は予測できます。そうすると、20年後にはこんなに空家が増えてしまうということが分かり、日本全体として人数が少なくなっている状況で、単純に移住してくださいという議論にもならないですし、どう考えていくのかということも出てきます。こういったシビアな現実をどう共有してまちづくりの力にしていくかということは、私たちも向き合っていかなければいけません。そういった意味では、この市民協働というまちづくりのフェーズが変わってくるのだと思います。悲観ばかりではなく、それをどうエネルギーに変えていけるか、見通したことでエネルギーに変えるということができると良いですね。

(委員)

川掃除やまつりなど、高齢の男性がしているイメージしかないのですが、もっと中学生や小学生も関わってもらえれば、遊びの延長で小さい頃から自治やまちづくりに自然と関われる環境になるのではと思います。先日、テレビで3.11の防災の話を見たのですが、避難訓練のために高台に登るのではなく、子ども達に普段から高いところで遊ぶ習慣をつけるということをされていて、習慣など、もっと身近にあるといいなと思いました。

正月に自治会の新年の寄り合いに行ったのですが、地蔵盆でお菓子をもらえなくなった頃から、この年齢になって集会に行くまでの間は、地域と関わる機会があまりなかったと感じていて、小学生から大学生くらいの期間でも地元に住んでいるのであれば、もっと関われる機会を自然と作れると良いなと思います。いろんな人のアイデアを聞いて、そんなまちななれば良いなと思います。おじいちゃんやおばあちゃんがやっているイメージが強くて、親世代が面倒だと感じることも、子どもがやっていたら自然とそういう感じになるのではないのでしょうか。新しく引っ越してきた人が自治会に入るのは、子どもが子ども会に入りたいからだという話も聞きます。もう少し、子どもが親を巻き込むという良い流れができればと思います。

(委員長)

新しい形や、楽しむといったところから出てくることはたくさんあるでしょう。これまでの形を疑う、どこまでこだわるのかということはあるかもしれませんが。若い世代は本当に関わりたがっていますね。大変、しんどいことだという設定から始まっているのですが、最近PTAでも、活動が活発になって役員となり手が増えてきている地域もあります。今までは罰ゲームのようになっていたのが、そうじゃないという発信が始まれば、そうではなくなってきます。形を変えてみる、疑ってみるというのも必要ですね。

(委員)

発信、声かけというのが大事だと思います。私の自治会もよく似ていて、会合の中では高齢者世代の意見が通って、若い人や女性が発言しても聞かずに終わってしまう状況なので、最近では、子どもや地域で発言をしなくなった人等に出会った時に声をかけることをしています。尋ねると、大学生などはいろんなことに興味を持っています。しかし、どのようにして取り組んでいけば良いかということが分からないので、そういう仕掛けづくり、仲間づくりが大切だと思っています。

まつりひとつとっても、私たちの時代は興味があって張り切っていました。親や祖父母、大人や友達みんなが見ていて、頑張ろうという気持ちになっていましたが、今はそういう場がありません。そういった地域の場をどうやって作ってイけるか、大人達をどううまく巻き込んでイけるか。少しずつ仲間をつくっていくには、やはり声かけが必要だと思います。

(委員長)

任せ方ということかもしれません。鶴の一声で決まってしまうようでは、いくら意見を言ってくださいといっても言えないので、若い世代や女性にどう事業を任せていくかという技術が必要ですね。聞き方や決め方も非常に影響していることが垣間見えました。

(委員)

今日たまたま移住してきた女性が相談に来られて、「自治会の会合にも積極的に参加していて発言したいけれど、声の大きい人がいて、発言したら怒られるのではないか、雰囲気が悪



くなるのではないかと、男性ばかりなので意見を言いづらいので、どうすればいいか」という話をしていました。なかなか聞いてもらえない、聞いてほしいけれど、集落の中でこれまでの歴史や慣習もあって、移住してきた人が何も知らずに発言したらダメなのではないかという思いを持っておられて、私も地域の歴史や、培ってきたことを知るということも大事なのではないかと思いました。私が住んでいる地域にあるケンケト祭りは、住んでいながら見に行っただけでもどんな風になっているかも知らなかったのですが、次の世代にも伝えたいと絵本を作成されていました。ただ、それを集落の中だけでされているので、もっと広げたら良いのにと思いました。そういった守りたいという思いはありながら、なかなか周知できない、有名なお祭りであれば注目もされますが、集落の小さな祭りであれば注目もされないのもっと知る機会があればいいなと思いました。

(委員長)

新しく来た人からすると、かき乱したいと思っているわけではなくて、一緒に関わりたいと思ってもルールやしきたりが分からないですよね。地域に住んでいる人ばかりであれば、教える、伝えるということがなくて、感じる、見て学んでという雰囲気かもしれません。そうすると、ガイダンスするということがあれば、逆に安心して地域に入ることができるのではないのでしょうか。そういった工夫をしている地域もあると思いますが、今の話は非常にリアルで、地域の外から入ってくる人にとってみると、ある意味で怖い集団に見えているということですね。決して怖くしているということはないはずですが、そのミスマッチ感があるのではという意見でした。

(委員)

この前市役所で、自治会長を対象にした地域創生講座がありました。その時に最前列でずっと腕を組んでつまらなそうにしている人がいたので、講師の先生がどうしてそんなにつまらないのかと聞かれました。するとその人は興味ないですとはっきり言われたんです。また、その場には女性はほとんどいなくて、高齢の男性ばかりで異様な雰囲気でした。

私が住んでいる地区の中では、祭りをしているところと、新興住宅地、県営住宅、市営住宅、旧の農家と非農家などが混ざっています。地区のコミュニティセンターに行くと予約が埋まっていていろんな活動をされています。

一方、毎月されている円卓会議に行くと、住んで良かったまちづくりとか、若者と老人の居場所づくりなどの話がいっぱい出てきます。支援すると言いますが、一方で支援してもらいたくない人も結構いますので、反対意見はなかなか言えません。人の世話をやっている人は満足していますが。

また、朝のあいさつ運動をしているが、子どもは確実に減っていると感じています。このままだと子どもがいなくなるのではと思うくらいです。

(委員長)

前半では、多様性という重要な話をさせていただきました。高齢者の男性が多いというのは、現役世代が忙しいということもありますが、本当にそれを疑わなくても良いのか、女性や外国人についても言及いただきました。また、新旧住民の壁もあります。

反対ができないという議論がありましたが、多様な意見をどう聞くか、意思決定にどう生かすかということ、あまりやってこなかったんですね。やらなくても良かった時代と、そういったことに取り組まないといけない状況もあるので、意思決定や議論のありようがそろ

そろ変わらなければいけないということかもしれません。

(事務局)

今回、祭りの話を聞いてカッコいいと思いました。私のところでは、祭りは簡単な神事とお酒を飲むというものですが、着物まで着て行うお祭りに憧れる、すごくうらやましく思い、もっとPRすれば地区に関係なくても参加したいという人がいるのではと思いました。

私の自治会は全員で100人にも満たないのですが、草刈りをしないといけないので、80歳の人もするわけです。地域としてやらないといけないことがあって、なんとか維持している。そうしたやるべきこと、拠り所があることは組織として大切で、祭りというのは拠り所の1つという意味では重要なのかなど。改善という部分もありますが、そういう拠り所がないといくら楽にしてもきりが無い。そういうことが自治組織の核の部分になるのかなと思います。

また、自治会の議論をこうしてみなさんにしていただくことを嬉しく思っています。地元でも自治会の議論をするのですが、歳をとった人ばかりで話をしていると沈滞した内容になります。このように若い方々に話をしてもらうのが非常に嬉しいです。

自治会に入ったばかりの人が議論できないとか、協働大賞の中でもレベルの違いがあってなかなか同じ組上で話せないということは確かにあると思います。レベルの違いをどう克服して意見を引っ張り出すかは、自治会の中では難しい課題です。

また、以前に外部の団体が、私の地元の自治会をフィールドに婚活イベントを企画されて、各家の窓にクイズを貼ってほしいと頼まれたことがありました。自治会が何かをするわけではないのですが、面白いなと自治会がざわついたこともあり、そういう外部からアクションをしてもらうのも1つの手段かと思います。例えばNPOと自治会がつながると、いつもと違うざわつきが出てくるのかなと感じました。

(委員長)

外の力を借りると良いざわつきというか、刺激になったりアイデアをもらえたりしますね。拠り所というのも本当にそうです。私も新興住宅地で育ったので、祭りの話を聞いてうらやましいと思いました。祭りのあり方も変容していて、京都の祇園祭も支え方が変わっています。住民達だけでしようと思っても、オフィス街になって住民がいなくなっているので、昔のやり方では、山や鉾を作る人が誰もいません。伝統を守るということに関して、祇園祭は急速に形を変えていて、どうやって維持するかというのは、まちの人達にとっての拠り所が故に、大胆な変革が起こって守れているという現実もあります。危機がなければ昔のまま続きますが、ある意味で拠り所がある、守りたいものがある地域では、形を変えてでも守れる、続けられるのかもしれませんが、実際にやっている地域の人からすれば、当たり前になっていて苦痛なのかもしれませんが、うらやましいと思う人が増えれば、まちの中でのありようも変わるかもしれません。自分たちの地域のことを客観的に見れないのは当たり前のことなので、いろんな人の目や声が入るといような風通しが、結果として自分たちの地域の誇りにつながっていくのかもしれませんが。

(委員)

私が住んでいる自治会も、20年近く経過していますが新興住宅地です。神社も拠り所も何もなく、しなければならぬということもありません。古くからいる人と移住してきた人の差もないんです。みんなだいたい同じような家族構成で、そのままスライド式に年齢が上がって

いく状況です。

最初のうちは子どもが多くて子ども会活動をしていたのが、急速に子どもが少なくなって、親世代だけでできていた見守りの活動も、ボランティアをお願いしないといけない状況になっています。高齢者もどんどん増えているのに、自治会の活動としては相変わらず子どもがたくさんいた時代のままになっています。高齢者からは、これからは敬老会など的高齢者中心の活動にしてほしいという意見もありますが、今までやってきたことをそのまま例年通りやっていくというのが楽なのでそのまま、高齢者の意見が上手く通っていない状況です。これは、新しいとか古いといった差はありますが、新興住宅はもれなく同じような状況ではないかと思えます。

また、私たちのように新しい自治会にいる人間は、伝統的な祭り、これまでずっと守ってこられたことが、人によってはそれが煩わしいから出てきたという人もいますが、世代によっては、外から見ていると面白そうと感じる人がたくさんいるのではないかと思えますし、参加する手段があれば、やってみたいと思っている人もいると思えます。自治会の人だけでやってきたことを、そうではない人も参加できるという事例を作れば面白いですし、反応する人がいるのではと思えます。

(委員長)

新興住宅であったり昔からあるところなど、自治会にはいろんなタイプがあるので、それぞれに議論しないといけないということですね。最後の方は、自治会の開き方みたいなことでしょうか。それを魅力だと思う人がまちづくりに参加する、住んでいないけれど参加するという方式が起こりうるという話です。拠り所や宝物がある地域なのか、そういうものではなくても人柄やちょっとした取組、関係性が人を引きつけるかもしれませんので、丁寧に見ていくことが大事かもしれません。

非常に大事な意見をたくさん出していただきましたが、時間も近づいてきましたので、本日の意見交換は終わります。来年度の委員会までにそれぞれでもっとポイントを出していただいて、次回に臨んでいただければと思います。

事務連絡として、次年度の展開について事務局から説明をお願いします。

### 【事務連絡】

\*次年度（任期2年目）

- ①協働のまちづくりを進めるための取組～地域コミュニティの存続について～  
実際にどこかの自治会と、困りごとの解決に向けて一緒に考え、実践を行う。
- ②「共に考え、共に創る」わがまち協働大賞  
5年目となる事業。今日出していただいた意見を反映させて実施する。

(委員長)

事務局から説明があったように、議論に上がっていた意思決定のやり方や、まちの価値の見つけ方、開き方といったいくつかのポイントを、一緒にやろうよと言っただけの自治会で、来年度、ぜひ実際にやってみて、全市的に役に立つような知見をためたいと思えます。

こういった委員会は行政が決めた筋書き通りにこなすようなものが多いのですが、この委員会は委員自らが仕事を作っていくような委員会です。来年度もやったことがないようなス

タイトルで、皆さんに手間や苦勞をおかけすると思いますが、進めさせていただいてもよろしいでしょうか。前向きで建設的な意見をいただきましたので、1つ1つ試したり、考えたりしながら、また来年度最初の委員会で整理したいと思います。

前半で議論いただいた協働大賞についても、地道な活動という重要なキーワードも出てきましたので、ぜひ心にとめておいていただければと思います。それでは本日の委員会を終わります。

閉会